

昭和天皇を知るための  
10冊

## 昭和天皇

——文書史料と学術書の間

山内昌之（武蔵野大学特任教授、東京大学名誉教授）

によって「戦犯」とされた人たちもそうだ。しかし司法は国の言い分を採用し、すべて敗訴した。裁判所が打ち出した法理は、「戦争被害受忍論」つまり「戦争では国民全体が被害に遭った。だからみんながまんしなければならぬ」というものだった。この「法理」で裁かれた、被害者原告の累々たる敗訴を振り返ったのが本書だ。

国策を決めた為政者から参政権すらなかった庶民まで「みんながまんしなさい」という理屈に説得力は乏しい。ところが二〇一三年に東京大空襲の国家賠償訴訟で原告敗訴が確定し、翌二〇一四年には大阪大空襲の国賠訴訟でも確定した。

被害者たちはその後、立法による救済を信じて国会議員への陳情などを続けている。八〇歳以上の老人たちが、だ。戦争を始めるのは為政者。為政者の判断ミスによる大借金は庶民に押しつけられる。そして長く清算されず庶民を苦しめる。拙著に限らず、本章で挙げた作品が伝えるのは、そういうことだ。

人は誰でも齢を重ねると、考えも生き方も変わる。こうした常識は昭和天皇の場合にもあてはまる。昭和天皇は、未成年から成人を経て成熟した大人になるまで、普通の市民なら到底経験することのない人生の波乱と世の変動に巻き込まれてきた。あるいは、天皇としての存在が世界に大きな波浪をもたらすこともあった。昭和天皇は私たちの生きた時代における最も複雑な歴史的存在にほかならない。昭和天皇を専制君主の変型にすぎないと考える者も、模範的な立憲君主だったと信じる者も、大正天皇の皇太子から摂政になったばかりの十代から二十代の裕仁親王と、三十代の昭和天皇を同じ世界観と政治信念を持った人物として扱うのは正しいのだろうか。このブックガイドでは、未公開の手紙と日記や、厳密な学術研究書を扱うことはしない。一般市民がたやすく図書館で読むことができ、書店ですぐに求められる書籍を紹介したい。各時期を象徴するトピックや人物をとりあげる

ことで、昭和天皇の実像を理解するよすがを得たいのである。

二つの大戦と一つの冷戦を経験し、二つの憲法下で相異なる君主と象徴だった昭和天皇は、年号では六十四年の長きに亘って在位した。その陰翳に綾どられた治世は、『昭天皇実録』に余すところなく記録されている。『日本書紀』から『日本三代実録』に至る六国史の伝統を受け継ぎながら、『明治天皇紀』はじめ近代の天皇実録の叙述様式を継承した編年体史である。日本史だけでなく世界史の研究でも重要な史料になる膨大な文献史料の読み方を指南してくれるのは、半藤一利・保阪正康・御厨貴・磯田道史『昭天皇実録』の謎を解く』であろう。そこで磯田氏は、『実録』を「世界文化遺産」だといってよ

いと言言している。

『実録』でまず印象的なのは、大正十(一九二二)年三月から六か月、皇太子として英仏伊など欧州各国を訪問した時の記述である。日本の天皇・皇太子として最初の欧州外遊であり、十九歳から二十歳にかけて多感な時期に、立憲君主国家の英国に対する皇太子の親近感をはぐくんだ。国王ジョージ五世から帝王学、エドワード皇太子(のちエドワード八世、ウィンザー公)から立憲君主と市民との関係について素直に多くの事柄を吸収した。そして、ベルギーのイーペル古戦場を視察し、六月十三日に感想をジョージ五世に送った。

昭和天皇を知るための10冊

- 宮内庁編 『昭天皇実録』 全十八巻、人名索引・年譜(東京書籍、二〇一五～一九年)
- 半藤一利、保阪正康、御厨貴、磯田道史 『昭天皇実録』の謎を解く』(文春新書、二〇一五年)
- 寺崎英成、マリコ・テラサキ・ミラー 『昭天皇独白録』(一九九一年/文春文庫、一九九六年)
- 惠隆之介 『昭天皇の艦長』 沖繩出身提督漢那憲和の生涯』(産経新聞出版、二〇〇九年/光人社NF文庫、二〇一〇年)
- 小田部雄次 『天皇と宮家』 消えた十一宮家と孤立する天皇家』(新人物往来社、二〇一〇年/KADOKAWA、二〇一四年)
- 原武史 『皇后考』(二〇一五年/講談社学術文庫、二〇一七年)
- ピーター・ウェツラー、森山尚美訳 『昭和天皇と戦争』 皇室の伝統と戦時下の政治・軍事戦略』(原書房、二〇〇二年)
- 古川隆久 『昭和天皇』 「理性の君主」の孤独』(中公新書、二〇一一年)
- 福田和也 『昭和天皇』 全七巻(二〇〇八～一四年/文春文庫、二〇一～一六年)
- 山内昌之・細谷雄二編著 『日本近現代史講義』 成功と失敗の歴史に学ぶ』(中公新書、二〇一九年)

「予ガ佇立スル目前ノ光景ハ、陛下ノ予ニ告ゲ給ヒシ如ク『イーブル戦場ノ流血凄惨』ノ語ヲ痛切ニ想起セシメ、予ヲシテ感激・敬虔ノ念、無量ナラシム」。

そして、六月二十五日には「戦争というものは実に悲惨なものだ」と感想を洩らした。「昭和天皇実録」の謎を解く』では、この感想を聞いた御付武官を通して陸軍首脳は天皇が反戦派ではないかと疑いを抱いた可能性があると指摘する。確かに後年の陸軍は何かと昭和天皇の平和への意志を無視して暴走しがちだったのは、その内部に天皇への反感があったからかもしれない。

ジョージ五世によれば、日本は「平和を無傷で手に入れた」という幻想を抱いていた。これはとくに陸海軍について言えるのではないか。『実録』によれば、昭和五十四（一九七九）年の記者会見で天皇はこう回顧している。

「英国国王ジョージ五世から立憲政治のあり方について聞いたことが終生の考えの根本にある。立憲主義に基づく英米寄りの天皇の国際協調主義と平和主義、これに反発した国内巨大勢力としての帝国陸軍との葛藤と対立は、『実録』叙述の隠れた筋書になっている。

#### 石原莞爾への不信

天皇はすでに『昭和天皇独白録』で陸軍に対する批判を隠していなかった。とくに満州事変（昭和六年）の立役者だった関東軍作戦主任参謀・石原莞爾への感想はにべもない。「一体石原といふ人間はどんな人間なのか、よく判らない」。これほど石原の個性を何の幻想もなくとらえた評をほかに知らない。ただし、二・二六事件の時の石原について、「満洲事件の張本人であり乍らこの時の態度は正当なものであつた」と一応の評価をしているのは、半藤氏が『昭和天皇実録』の謎を解く』で述べているように、「昭和天皇の政治的な勘の鋭さ」なのかもしれない。

侍従武官長・本庄繁は、満州事変の関東軍司令官であり、石原と一緒に天皇に拝謁した。昭和七年九月八日、天皇は勅語を下しながらも、満州人に独立の意志がないのではないか、関東軍が計画を立てた事変という風聞があるが真偽は如何にとただした。『実録』は本庄らの答えを伝えていない。この頃すでに、陸軍に天皇の意志をないがしろにする風潮が蔓延していたことは『実録』の随所から読み取れる。

石原莞爾が明治このかた陸軍が生んだ屈指の戦略家だったことは間違いないにせよ、宇垣一成大将の組閣阻止、人事発令もなしに関東軍参謀副長の職を放棄して帰国するなど職業軍人としての矩を越えたあたりを昭和天皇はきちんと見逃さなかった。いたずらに石原

を軍事カリスマだと先入観を持たないあたりに天皇たる所以があるのだろう。

### 『独白録』ににじむ内面

『独白録』は天皇の内面や人物への好悪を赤裸々にさらしている点でまことに興味深い史料である。『実録』は、『独白録』を典拠史料として参照している。これは、文藝春秋が世に出した小ぶりの史料を信頼できる文書として宮内庁が認めたことを意味する。他方、惠隆之介『昭和天皇の艦長』は、裕仁親王が訪欧時に座乗した御召艦「香取」の艦長・漢那憲和の伝記である。昭和天皇も晩年に手にした本らしい。裕仁皇太子の訪欧は、沖繩出身の海軍軍人として操艦術では並ぶ者がいない漢那に委ねられた。薩摩出身の艦長たちがぐやしがったという説もある。沖繩立ち寄り最初から予定に入っていたわけでない。それを後援したのは母の貞明皇后であった。大正天皇の皇后は、御召艦が沖繩に寄港できたら漢那も沖繩県出身者としてさぞかし「欣幸」でしようと言葉を賜わった。これは強いバックアップであり、予定に明示されていないのを「残念」に思うというメッセージまで人を介して改めて伝えたほどだ。沖繩と沖繩県人への思いを病気がちの天皇に代って率直に吐露したのかもしれない。当時の沖繩にはT型フォードの自動車一台あっただけなので、

一同は皇太子を中心に人力車で首里まで出かけた。その分だけ県民は後の昭和天皇の顔立ちや雰囲気をまぢかに見られたはずだ。沖繩では県民から大歓迎を受け、漢那の母とも会っている。帰艦後も、自ら所望した「永良部うなぎ」を食して美味だと感想を述べた。欧州旅行に向けた自由な生活の第一歩は沖繩上陸と県民の歓迎から始まったのである。

それにしても、昭和天皇は二・二六事件で反乱軍青年将校に同情的だった山下奉文(当時陸軍省軍事調査部長)、満州事変の首謀者だった関東軍高級参謀の板垣征四郎、作戦主任参謀の石原を決して許していなかった。その証左は『実録』から見とれる。昭和十四年七月五日午後三時三十二分、板垣陸軍大臣の出した八月人事異動案につき、山下中将と石原少将の親補職転任に「御不満の意」を明示したとある。これは、それぞれ第四師団長(大阪)、第十六師団長(京都)への任命を拒否するということだろう。この時は、板垣の「能力にまで言及される」とある。お前は頭が悪いと痛罵したのはこの時だろう。翌六日に板垣は「頗る恐懼し非常に重大に考えている」と言上した。読みようによっては、板垣の聞き直り、辞めてもいいのか、といった当時の陸軍軍人の倨傲を感じさせないだろうか。天皇はひとまず「御叱責の程度」であり辞表提出を求めたものでないと言葉を返した。それでも天皇は粘り強い。七日になって参謀総長の閑院宮に二人の転補を陸軍の長老と

してどう思うかと下問する。十一日に閑院宮は妥当だと答えたが、天皇は「なおお許しなく、改めて善後策につき御下問になる」。結局、陸軍は上奏書類を取り下げて、一部訂正の上再上奏という異例の事態になった。二人の人事は十二日ようやく内奏を受けて承認したのだ（『昭和天皇実録』第七）。天皇は股肱こたうの重臣を殺害した二・二六事件と満州事変の陰謀家たちをよくよく嫌い抜いたことが分かる。とくに両事件は、私に兵を動かした点が共通している。関東軍司令官・本庄繁が板垣や石原にかつがれて動き、その本庄が侍従武官長として天皇側近になる陸軍人事についても天皇は不愉快だったに違いない。二・二六事件での本庄を通した天皇の反乱軍将校への怒りは尋常ではない。本庄がすぐに襲撃を憲兵隊か当人に連絡すれば、殺害時刻が遅い陸軍教育総監・渡辺錠太郎は被害を免れたのではないかという一部の指摘は、まさに天皇の思いに通じるのかもしれない（『昭和天皇実録』の謎を解く）。

#### 皇族たちとの関係

昭和天皇は立憲君主制による手続きを重んじた。この意味は、政党内であれ軍人・官僚であれ組織人たる者は、憲法はじめ関連法規に基いて動くべきであり、それを無視する者を嫌ったということだ。この点は皇族についても例外でなかった。裕仁皇太子が欧州を訪

問しても、パリにいながら表敬訪問さえしなかった皇族がいる。東久邇宮稔彦王である。昭和天皇は、この原体験を含めて規矩にはまらぬ稔彦王の生き方に同感できなかった点多かったに違いない。小田部雄次『天皇と宮家』は、男系皇族が先細りになる現在、十一

旧宮家の皇族復帰を求める意見もあるなかで、旧宮家の歴史的由緒や歴代当主の輪郭を知ることのできる本だ。皇族の我儘もよく描かれている。稔彦王はパリに長期滞在して宮内省をやきもきさせていた。その理由は妃との相性がよくなくパリに愛人がいたらしく、他の皇族との仲が悪いことであつたらしい。それにしても皇太子の訪仏の際に出迎えはおろか、挨拶にも行かなかつたのは尋常でない。十四歳年下とはいえ皇太子の方から稔彦王の許に向いたという不自然さは、後々まで天皇の軽視につながった。大正天皇が崩御しなければ八年目になったフランス滞在を切り上げることもなかつたはずだ。このあたりを含めた詳しい顛末は、浅見雅男『不思議な宮さま』（文藝春秋）に詳しい。

さて、昭和天皇から見て規矩に従わない皇族には、他ならぬ弟の秩父宮も含まれていたのではないか。二・二六事件における宮の不思議な振舞いを天皇が不審に感じなかつたはずもない。これを「秩父宮ミステリー」と名づけたのは、原武史氏と保阪氏との『対論

昭和天皇』(文春新書)である。根本の疑問は、二・二六事件の際に、秩父宮は何故に上野まで最短距離の東北本線、常磐線ではなく、羽越、信越本線の遠回りで上京したのかという点にある。鉄道研究家でもある原氏によれば、羽越、信越本線だと上野到着は午後四時五十九分、東北、常磐だと午前十時二十五分ということになる。弘前で大隊長を務めていた秩父宮が連隊長から許可をもらったのは、夜八時だったために夜中の十二時二十二分発の羽越本線経由にならざるをえなかったのか。青森経由で東北本線なら午後八時四分に出し、ある状況になったらその列車に乗るプログラムが誰かの手で出来ていたのではないかと解釈する。しかし、そのような段取りをつけた人物の名は出していない。いずれにせよ、事件の推移に合わせるかのように、並行的に列車が遅れたり、各駅停車に乗り換えするなどして時間を稼ぐか、調整しながら東京に向かうのである。こうして水上に着くと、陸軍と皇族に影響力のある東京帝国大学教授の平泉澄が待ち構えていた。平泉は宮の列車に乗り込んで約一時間半にわたって何かを話し合った。これを原氏は「非常に奇怪な行動」だとし、保阪氏は「ほんとうに誰かが仕組んだと思えない」と応じている。この「誰か」を解き明かす決定的な史料は残念ながら出ていない。しかし、平泉は「みちのくのつ

もる白雪かき分けていま日の皇子は登りますなり」と詠った。この「登る」は登極(即位)の他に意味はないだろう。原・保阪両氏は、秩父宮に天皇に代る計画に乗る意志はなかったとする。いずれにせよ昭和天皇の地位は決して安定していたわけではないのだ。

そもそも秩父宮と青年将校の近さを案じて、宮を歩兵第三連隊(二・二六事件の蹶起部隊の本拠)付から弘前の第三十一連隊に大隊長として移した背景には、天皇の意向もあったとされる。そして、秩父宮を溺愛していた皇太后節子(大正天皇皇后)は新たに同宮妃となる勢津子をも何かといたわった。これと対照的に昭和天皇と良子皇后への皇太后の姿勢にはどこかよそよそしいところがあつた。こう説くのは、昭和天皇を母や皇后という女性の視角から考えた原武史『皇后考』である。昭和天皇は、祖父や父と違い、宮中祭祀を概ね自分でとりおこなう勤勉さと祖宗への尊崇の念をもっていった。しかし皇太后は、それを「形式的ノ敬神ニテハ不可ナリ、真実神ヲ敬セザレバ必ず神罰アルベシ」と語った。これは枢密院議長だった倉富勇三郎が西園寺公望から聞いた話である。それにしても、昭和天皇に「神罰アルベシ」とはおだやかではない。原氏はこれらをもって、母・皇太后は昭和天皇がその地位に「ふさわしいかどうか、疑念を抱いていたようにも見える」と語る。

二・二六事件の性格は、天皇と秩父宮の争いであり、「秩父宮擁立運動」だとする見方は

当時から相当に流布していたらしい。そうした運動には、かつて皇后の女官長を務めた島津治子（ハル）も関係していたようだ。こうした全体像をパノラマのように描くのは史料的にむずかしい。しかし、皇后・皇太后の側から昭和天皇をとらえる手法は新鮮であろう。

282

### 新しい昭和天皇像

こうした歴史の変化を踏まえて、アメリカ人の歴史家ピーター・ウエッツラー『昭和天皇と戦争』は、争いを超越した開明的君主、はたまたアジア版マキャヴェリストといった極端な見方を排する。彼は「国家の頭首」というよりも皇室の家長として精一杯奉仕する義務と権限の持ち主として昭和天皇を描いた。伝統と近代性は昭和天皇の内面で矛盾せず補完しあった。ウエッツラーは、近代的な西欧の学問、たとえば憲法学説、自然科学、軍事戦略は、日本社会における皇室の至上性と、世界における日本の優位性を保持するだけでなく、高めるための手段だったと考える。言い換えれば、立憲君主だったと自己主張する昭和天皇の地位は、皇室の家長や日本の天皇たる伝統的な立場と少しも矛盾するものではなかった。この点だけでなく、昭和天皇はルーズヴェルトやチャーチルなどの同時代人と同じく、立憲主義は最終目的でなかった。むしろ他の政治家と同じく権力の達成と保

持こそ主要目標だったのだ。その目標とは、時に立憲主義という近代的なしばりで天皇権力を制限するとともに、保護もした日本の伝統の枠内で皇室の歴史を守ることにあった。ウエッツラーの書物は、昭和天皇の政治的生活を支配した思考様式と、戦前日本の統治権と統帥権の意志決定で天皇の果たした役割を知る上で有益である。そして、そのバランス感覚と良識的な歴史解釈において外国人とくにアメリカ人の研究で注目すべきものである。最後に、戦後の昭和天皇はいかにあろうとしたのか。戦前から戦後まで一貫して扱った昭和天皇論としては、論壇学界の左右から古川隆久『昭和天皇』と福田和也『昭和天皇』の二点が出ている。前者は小ぶりの新書一冊、後者は七部に及ぶ大河作品である。この双方がその後に出された『実録』によって本格的に増補されるのか、いずれ楽しみなことである。また、昭和天皇をキーパーソンとする昭和史の広がりについて、山内昌之・細谷雄一編著『日本近現代史講義』の各論も最後に挙げておきたい。

戦前の大日本帝国憲法第十一条で昭和天皇は陸海軍の統帥権者とされていたが、『実録』は立憲君主として第二次大戦を回避する外交努力に熱心だった点を強調する。平和主義者にして立憲君主たる姿を昭和天皇に求める『実録』は、マッカーサーとの会見（昭和二十年九月二十七日）に付して、「なお」と紀事本末休を使って、天皇が戦争に伴う全責任と、

283

執筆者紹介（現職は、各執筆者のページ参照）

保阪正康（ほさか まさやす）

1939年生まれ。同志社大学文学部卒業。『令和を生きるための昭和史入門』、『東條英機と天皇の時代』、『あの戦争は何だったのか』、『昭和の怪物 七つの謎』、『ナショナリズムの昭和』など著書多数。

中島岳志（なかじま たけし）

1975年生まれ。京都大学大学院博士課程修了。北海道大学大学院准教授を経て現職。『血盟団事件』、『中村屋のボース インド独立運動と近代日本のアジア主義』、『親鸞と日本主義』、『保守と大東亜戦争』など著書多数。

原武史（はら たけし）

1962年生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。東京大学大学院法学政治学研究科博士課程中退。明治学院大学名誉教授。『松本清張の「遺言」』、『〈出雲〉という思想』、『大正天皇』、『完本 皇居前広場』、『地形の思想史』、『平成の終焉』など著書多数。

五百旗頭薫（いおきべ かおる）

1974年生まれ。東京大学法学部卒業後、同大法学部助手に。首都大学東京准教授などを経て現職。著書に『〈嘘〉の政治史』、『大隈重信と政党政治』、『条約改正史』。

奈良岡聡智（ならおか そうち）

1975年生まれ。京都大学大学院法学研究科博士後期課程修了。同大学院法学研究科助教授を経て、現職。著書に『加藤高明と政党政治』、『八月の砲声』を聞いた日本人』、『対華二十一ヶ条要求とは何だったのか』など。

牧野邦昭（まきの くにあき）

1977年生まれ。東京大学経済学部卒業。京都大学大学院経済学研究科博士後期課程修了。摂南大学准教授を経て現職。著書に『新版 戦時下の経済学者』、『柴田敬 資本主義の超克を目指して』、『経済学者たちの日米開戦』など。

井上寿一（いのうえ としかず）

1956年生まれ。一橋大学大学院法学研究科博士課程単位取得退学。著書に『戦争調査会』、『危機のなかの協調外交』、『戦前日本の「グローバリズム」』、『日中戦争 前線と銃後』など多数。

日本の軍人と政治家の行為にも直接に責任を取ると発言した旨を伝える二つの史料を紹介している。また、終戦後に退位の意志を側近に伝えた事実の記述（昭和二十年八月二十九日）もある。しかし『実録』はあくまでも天皇の心中に入ろうとしない。戦後の天皇は国民統合の平和的な象徴としての姿を強めたことが『実録』の各条からうかがわれるのみである。